

MLB 日本人選手の心理特性と心理特性に 関連する競技背景

スポーツクラブマネジメントコース

5013A316-1 澤井 芳信

研究指導教員：間野 義之

緒言

スポーツ界のグローバル化とともに、海外で競技をする日本人アスリートは年々増えている。野球では、メジャーリーグベースボール（以下、MLB）において、日本人選手の獲得はチーム補強に加え、日本企業のスポンサー獲得を通じた日本市場の開拓という経営戦略上重要な意義を持ち、大きな直接的利潤をもたらすため（川井，2009）、移籍する選手は増加している。また、2006年に開催されたワールドベースボールクラシックで優勝した日本代表30名のうち、当時MLBの球団に所属していた選手を除くと、その後13名が海外移籍を果たしており、MLBへの移籍を目標としている選手は年々増えていると考える。こうした国内選手の海外移動は、優秀な人材の流出という問題として扱われる一方で、スポーツ界におけるグローバル人材の育成という文脈でも語られることがあり研究対象として注目するに値すると考えられる。

先行研究

日本人野球選手の海外移籍に関する経年変化について、2005年までに101人の日本人がアメリカ（含む、マイナーリーグ、独立リーグ）に移籍していることを明らかにしており、近年においては、高橋・佐々木（2012）が日本人スポーツ選手の海外移動がキャリア形成に与える影響を検討している。主として海外移籍の背景や要因などを社会学的な視座から論じており、一方で、アメリカの野球選手において心理的スキルの重要性が実証されていることや、MLBスカウトが体力面より心理的側面を重要視としているという徳永（1999）の言説から、心理的な特性に着目をする重要性が伺える。

これらの課題に動機づけられ本研究ではMLBに移籍をした日本人選手の心理特性および心理特性に影響を及ぼす競技背景との関係を明らかにすることを目的とした。

方法

MLB球団に属するスカウトを対象とした、MLBで活躍するために必要な能力について、半構造化インタビューを行った。それらのインタビューを基に質問紙を作成し、定量調査を行った。研究の手順を以下に示す。1.質問項目作成のためのMLBスカウトの予備調査 2.心理的特徴測定尺度の質問項目作成 3.MLBに移籍した日本人選手の心理特性の抽出 4.心理特性と競技背景との関連性、以上の4つの手順に沿って進めた。

研究対象は、MLBに所属している、また一度でも所属していた経験の日本人選手54名を対象とした。調査はWeb調査、FAX調査での自記式調査で行い、選手所属の球団・事務所に依頼した。2013年11月19日から2013年12月22日の日程で質問紙を配布・回収を行なった。

MLBスカウト2名の半構造化インタビューから抽出された項目は、「競争力の高い人材」、「負けず嫌い」、「考える能力が高い人」、であった。そこで競争力や負けず嫌いを明らかにするための尺度と、思考力を明らかにする尺度として先行研究の検討から、Gill（1988）が開発したSport Orientation Questionnaire（以下、SOQ）の邦訳版の有効性を調査した研究（若山・猪俣，2000）から4因子24項目。批判的思考態度を明らかにした平山・楠見

（2004）から4因子33項目。合計8因子57項目を問うた。SOQの質問に対しては、「1、全くそう思わない」から「5、とてもそう思う」までの5段階での回答を求めた。また批判的思考態度の質問に関しても、「1、あてはまらない」から「5、あてはまる」の5段階での回答を求めた。その他の調査項目としては、選手個人属性（両親の競技スポーツの有無、野球チームに入った年齢、小学生時代使用したボールの種類、中学生時代使用したボールの種類、高校生時代はレギュラーだったか、甲子園には出場したか、プロ野球選手になるまでに挫折経験はあるか、ロールモデルとした人物はいるか、プロ野球選手になろうと思った年齢、MLBに挑戦したいと思った年齢）10項目をそれぞれ設定した。

分析方法

スポーツ達成志向尺度および批判的思考尺度に対するサンプルの回答傾向を示し、各因子においてクロンバックの α 係数を算出した。さらに、サンプルの特徴を確認することを目的として、各因子における因子の平均値を従属変数とする1サンプルのt検定を行なった。なお、今般の調査においては、参照グループがないため恣意的に3.5を検定値とした。

競技に対する属性として、調査表の結果から、選手の生い立ちに着目した、「親の競技スポーツ経験」、「少年野球チームに入った年齢からプロ野球選手になりたいと思うに至った年数」、「レギュラー経験」、「甲子園出場経験」、「少年野球チームに入った年齢からMLB選手になりたいと思うに至った年数」を抽出し、群分けによるMann-whitney-U検定により、群間の有意差を確認した。

結果

対象者54名のうち、有効回答は20名（回答率37%）であった。年齢の平均値は39.4歳（ $SD=\pm 5.185$ ）である。15名が両親の何らか、あるいは双方が、何らかの競技スポーツの経験を有していた。野球を始めたのは、20名が小学生時代であった。硬式が4名、軟式が17名。中学生時代では、硬式が9名、軟式が12名であった。高校生時代、3名がレギュラーではなく、14名が甲子園に出場していなかった。17名の選手がプロ野球選手になるまでに挫折経験があると回答した。またプロ野球選手になろうと思った年齢においては、13名が小学生時代であった。MLBに挑戦したいと思った年齢は、平均値は25.9歳（ $SD=\pm 6.257$ ）であった。

スポーツ達成志向尺度

各因子の平均値は、目標志向性が3.13、競争参加動機が3.57、競技成功動機が4.61、勝利志向性3.10であった。各因子においてクロンバック α 係数を算出し、適宜修正を加えた。その結果、「勝利志向性」については $\alpha = 0.61$ とやや低い値に留まったものの、他の因子では望ましいといわれる $\alpha = 0.7$ 以上の値が得られた。

批判的思考態度尺度

各因子の平均値は、論理的思考への自覚が3.60、探究心が4.37、客観性が4.12、証拠の重視が3.55であった。同様に、各因子においてクロンバック α 係数を算出し、適宜項目の削除を行った。その結果、全ての因子で望ま

しいといわれる $\alpha = 0.7$ 以上の値が得られた。

さらに、サンプルの特徴を確認することを目的として、各因子における因子の平均値を従属変数とする 1 サンプルの t 検定を行なった。(Table1) その結果、「競技成功動機」、「探究心」、および「客観性」において検定値よりも有意に大きい値であることがわかった (それぞれ、 $t = 8.47, p < .001$; $t = 5.51, p < .001$; $t = 3.76, p < .001$)。他方、「目標志向性」と「勝利志向性」については、検定値よりも有意に低い値を示した (それぞれ、 $t = -2.90, p < .01$; $t = -3.09, p < .01$)。

Table 1 1 サンプルの t 検定の結果

	平均値	標準偏差	t 値	有意確率	平均値の差
目標志向性	3.13	0.56	-2.90	0.009 **	-0.37
競争参加動機	3.57	0.78	0.40	0.694	0.07
競技成功動機	4.61	0.59	8.47	0.000 ***	1.11
勝利志向性	3.10	0.58	-3.09	0.006 **	-0.40
論理的思考への自覚	3.60	0.86	0.52	0.607	0.10
探究心	4.37	0.71	5.51	0.000 ***	0.87
客観性	4.12	0.74	3.76	0.001 ***	0.62
証拠の重視	3.55	1.17	0.19	0.850	0.05

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$
n = 20
検定値: 3.5

Mann-whitney-U 検定

回答者の「心理特性」と「競技背景」の関連性を調査するために、競技背景を従属変数、心理特性を独立変数とする Mann-whitney-U 検定を行なった。2 群間の差を検定した結果を Table 2 に示す。「心理特性」と「競技背景」の差において分析した結果、「証拠の重視」において、親の競技スポーツ経験が「有」群 (n=14) の中央値は 11.0、「無」群 (n=6) の中央値は 9.0 で $p = 0.041$ 、U 値 17.000 と「有」群の方が高いという有意な差が認められた。「探究心」においては、少年野球チームに入った年齢から、プロ野球選手になりたいと思った年齢までの年数が「5 年未満」群 (n=12) の中央値は 24.0、「5 年以上」群 (n=8) の中央値は 20.5 で、 $p = 0.022$ 、U 値 21.500 と「5 年未満」の方が高いと有意な差が見られた。「客観性」においては、レギュラー経験の「有」群 (n=18) の中央値は 22.0、「無」群 (n=3) の中央値は 16.0 で、 $p = 0.038$ 、U 値 6.000 と「有」群の方が、有意な差が認められた。

Table 2 Mann-whitney-U 検定による 2 群間の差の検定

	親の競技スポーツ経験		少年野球チームからプロ野球希望まで		レギュラー経験の有無	
	有	無	5 年未満	5 年以上	有	無
スポーツ達成志向尺度						
批判的思考態度尺度						
探究心			12.50	>*	6.56	
客観性					11.65	>* 4.00
証拠の重視	12.29	>*	6.33			

枠内の数値はすべて有意確率: $p < .05$

考察

心理特性

スポーツ達成志向において、MLB に移籍した日本人選手は「競技成功動機」が全体的に高いという結果が得られた。成功動機について、選手それぞれに異なった定義があると考ええる。競争参加が主たる理由ではなく、選手各々が個人の成功を設定し、自らを高めることに力を注ぐため、競技成功動機が高いのではないかと考えられる。

次に批判的思考態度尺度における項目においては、「探究心」と「客観性」に高い数値を得られた。これらは、自

らが更に成長するための課題克服やスキルアップにおける問題解決につなげる項目であると考ええる。「探究心」とは自発的に思考し、「客観性」においては自制的に思考する能力だと考えられ、チャレンジしながら、自らを振り返ることができる、この二つのバランスを高い意識で保つことができるということが特徴であり、海外でプレーするには重要だと考える。

心理特性と競技背景

「親の競技スポーツ経験の有無」で分けた 2 群において、「証拠の重視」に有意差が見られた。競技スポーツを行なう中、試合中、練習中、自ら判断する場面がある。スポーツとは、瞬時に判断を求められる。競技スポーツ経験者の親は、こどもの成長評価として「スポーツ」の尺度があるため、子供のころからスポーツの達成度などによる評価基準が与えられ、自己評価にスポーツに関する「証拠」を求める姿勢が生まれているのではないかと考える。

次に少年野球チームに入った年齢とプロ野球選手になりたいと思った年齢が近い選手ほど、「探究心」が強いことに有意差が見られた。幼い頃に具体的な夢、目標を持った選手ほど、「探究心」が強い選手だと考えられる。幼い頃から目標を持たせることが「探究心」という特徴を持たせるうえで、重要なことであると考ええる。

本研究の回答者には、野球チームに入ってから 5 年以内に、MLB に挑戦したいと思った選手はいなかった。このことは MLB 選手になることについて、回答者の子ども時代の具体的な目標として挙げられていなかったことを示唆している。しかし、MLB で活躍している日本人選手が増えている近年、幼い頃より MLB を見ている機会が増えている。今後、日本人 MLB 選手が増えることと、MLB で活躍する日本人が増えることが考えられる。

「客観性」と「レギュラー経験の有無」について有意差が見られた。レギュラー経験が有る選手においては、「チーム内の自分」という立場を意識することで客観性が培われたのではないかと考えられる。レギュラー経験が無い選手においては、「客観性」が低い、「客観性」が低いというのは、主観性に関する性格特性としてあげられており (植木, 2013)、主体性の強さを示していると考えられる。

結論

本研究により、海外移籍をした選手の実証的データを得ることにより、心理特性、及び心理特性と競技背景との結びつきが明らかになった。少年期からの競技背景が心理面に及ぼす重要性を示唆している。

各選手の MLB に行った経緯、タイミング等の調査ができなかったことが課題である。現在の日本プロ野球の制度から、急激にサンプル数が増えることはないと考えられるため、今後実証的データとしてさらに詳細な研究を行なうためには、インタビュー調査等から環境的、社会的特性も含め、より深い調査が必要であると考ええる。

また、心理特性と競技背景の有意な関連性から、スポーツ教育現場における体験や環境が、身体的成長だけでなく目標設定や社会性を培う機会として機能する可能性が考えられる。研究結果として実践への提言へとつながる要因を示すには、さらなる調査・研究による心理特性の分析が必要と思われる。